

「私の立ち位置は」

私は今年で65歳、来年3月末で5年間の再任用期間も終了し、都の教員を退職する。23歳での新規採用以来42年間、あっという間の教員生活であった(野津田高校6年、東大和高校10年、府中工業高校11年、片倉高校15年)。

その間ずっと高校野球の現場にいて、うち35年間は監督として指導にあたった。私自身、高校時代(東京学芸大学附属高校)は野球部員として3年間活動をしたが、たいした選手ではなく、大学入学後たまたま「母校のOB監督をやってくれないか」と誘われ、なんとなく引き受けてから始まる高校野球との関わりである。大学卒業後すぐ野球部の顧問となったわけだが、あの頃まさかこんなに長く高校野球と関わり続けることになるとは全く想像できなかった。そもそもこの頃、監督だなんて偉そうに言っていたことを思い出すと赤面するくらい恥ずかしい。野球の指導者として、教員として(社会・世界史の強化担当として、担任としてなど)、いつも何をすべきなのか、何が正しいのか悩み続けていた(これは今でも同じである)。

2校目で当時「都立の星」と言われた東大和で佐藤道輔先生と出会わなければ間違いなく、こんなに長く高校野球に関わる事はなかった。その後、府中工業での一からのチーム作りから都ベスト8まで、高江洲拓哉投手の中日ドラゴンズドラフト指名入団、片倉での強豪校を次々と破り西東京ベスト4、ベスト8に進出したこと、日本高野連より育成功労賞を受賞したことなど、私にとって充分すぎるほど高校野球の指導を堪能させてもらったし、評価もしてもらった。甲子園出場はまだとも言われるがそんな簡単に口に出せる目標ではないし、私などが言うのもおこがましい。

昨年までは定年退職とともに監督を辞めることになるのだろうと思っていた。自分自身の高校野球指導の総括のつもりで本を書き、自費出版もした(「甲子園の心を求めて」と私)。辞めるまでの間、勝ち負けだけにこだわらず、自分が考える理想の高校野球を選手たちに語り、そんなチームを目指して精一杯頑張ろうと考えていた。しかし、いざ立ち止まってみるとそれがどんな野球なのか自分の中でまだ揺れていて結論が出ていなかった。正直、今でもまだ結論がはっきり出ているわけではないが、今のチームの指導の中で漠然と見えてきたものがある。加えて以前ならわからなかったことが、今ならわかるということがどんどん出てくる。あの時はあんな事しか言えなかったが今ならこんなアドバイスができる、まだまだ自分は成長できる。そう考えるともっと続けたい、納得できるまでとの思いが湧き出てきた。しかしそんなことを言ってもキリがないこと、それは自分のわがままであり、自分が辞めて若い指導者にその座を譲ることがチームにとっても都の高校野球にとっても良い事かもとも思った。そしてそんな葛藤がずっと続いた。

そんな私の気持ちを察したのか、飯田一史先生が「自分ができる限りサポートしま

すので先生は片倉で監督を続けてください」と言ってくれた。飯田先生は東大和野球部出身の教え子で、大学時代は3年間府中工業で私と一緒に指導してくれた仲間、私の近くにおいて私の考えを最も理解してくれているかもしれない。こんなことを言ってもらえる私は幸せである。4月からこられた校長先生からも部活動指導員として残って指導を続けてほしいと言ってもらえた。

そしてお言葉に甘えて来年4月からも監督を続けさせてもらうことになった。長年の友人である小山台高校の福島正信監督と同じ立場である。

周囲から「いつまでやるつもり」とか「年寄りがしつこく辞めないから、若い世代の指導者があぶれちゃう」などの批判を受けるつもり。それでも監督を続けていくからには今の自分にしかできないチーム作りをしていくこと、それで若い指導者の反面教師となることを含め何らかの道標にならなければいけないという責任・覚悟は自覚してるつもりでいる。